

4-1-9-3 麻酔科、手術室

鈴木康之、伊東佑之

1. 診療活動

平成 17 年度は 4527 件の手術室内外での麻酔管理をおこない（無痛分娩は除く）、国立成育医療センター開設以来過去最高の麻酔件数となっている（図 1）。診療科別では外科 700 件、耳鼻咽喉科 595 件、産科 484 件、眼科 398 件、泌尿器科 356 件の順に多い（図 2）。年齢別では 1 歳から 5 歳が 1517 件、6 歳から 18 歳が 1438 件、1 歳未満の乳児の症例が 707 件（15.6%）、うち新生児症例は 91 件（2.0%）となり、新生児症例の絶対数も増加傾向である。また、本年度は小児肝臓移植が稼働し、移植免疫科、外科、消化器科、集中治療科との連携により、末期肝不全や激症肝炎など予後不良の疾患の救命治療に寄与している。今後も当センターが全国で唯一の 20 床の小児集中治療室を備えた重症小児疾患を扱う施設としての役割として小児肝臓移植患者の増加が予測される。

心臓カテーテル検査、MRI などの検査麻酔とともに乳幼児の放射線治療の全身麻酔依頼件数が増加している。連日 20 から 30 回の全身麻酔による治療計画がたてられ、麻酔科医の手術室外での活躍も期待されている。

開設以来麻酔科医が硬膜外麻酔による無痛分娩をおこなっており、その件数は平成 14 年 82 件、15 年 222 件、16 年が 260 件、17 年が 298 件と年々増加している。開設当初は関係各所の理解や連携が不十分だったため、深夜帯のカテーテル挿入など麻酔科医の負担が多かったが、計画無痛分娩を推奨するようにしている。昨年読売新聞に当センターの無痛分娩が取り上げられ、評判が広まり現在経陰分娩の約 28%が無痛分娩になり、今後一層増加すると予想される。

ハイリスク妊娠の増加にともない帝王切開手術が増加している。その周術期合併症で 17 年度に肺梗塞症例が帝王切開術後に 2 例あったが、幸い早期発見と急性期初期治療により、2 例とも救命することが可能であった。今後もハイリスク患者の増加にともない、伊東佑之手術室医長を中心に周術期肺血栓塞栓予防診断マニュアルの作成に着手している。緊急帝王切開は母体胎児ともに危機的な状況におちいることが少なくなく、出血多量の症例も麻酔科当直医の的確な判断により母体救命に貢献している。しかし、総合的な内科重症患者治療体制を持たない当施設としては、術後母体合併症によっては早期に成人総合医療施設への搬送が求められ、成人総合医療施設との協力体制が確立されつつある。

また、当直帯においては手術集中治療部として医師 4 名で当直し、手術室業務と集中治療室業務を協力体制のもとにおこなっている。2 名の麻酔担当医が夜間帯の緊急手術や、病棟での急変患者の対応をおこなっている。緊急麻酔症例も増加しており平成 17 年度は 325 例で、全麻酔症例の 7.2%であった。

麻酔科業務のなかで術前患者の評価は重要であり、当科では開設以来麻酔科外来にて術前外来を行っており、効率の良い手術室運用に貢献している。麻酔科術前評価外来は 2 名の麻酔科医が担当し、それと並行して CT、ABR、脳波検査などの鎮静外来、在宅酸素療法、在宅人工呼吸器外来、無痛分娩外来をおこなっている。在宅呼吸管理の患者数も年々増加し、在宅酸素患者は 110 名、在宅人工呼吸患者は 40 名となった。特に在宅人工呼吸患者は他診療科とのチーム診療のためデイケア室のベッドを利用して診察をおこない、患者が移動せずに済むように利便性をはかっている。

その他一般病棟の 9 病棟でも常時 12 名程度の慢性人工呼吸管理患者の呼吸管理をおこなっており、麻酔科医の業務は 24 時間体制で多忙である。

2. 教育

毎朝 7 時 30 分から麻酔症例検討、抄読会のほかに、救急、麻酔、ICU のテーマ別 30 分間講義、帝京大学諏訪教授の講義と早朝にレジデントに対して講義をおこなっている。

3. その他

手術症例の麻酔管理、病棟呼吸管理、病棟疼痛管理、麻酔科外来での術前評価外来、鎮静外来、在宅酸素人工呼吸管理外来と多種多様に渡る業務を科内のチームワークおよび他科との連携により、スムーズにこなしている。麻酔科は今後もより一層部内および他科とのチームワークを大切にし、多種多様な疾患や合併症の多い症例のリスクを正しく評価し、各診療科との協力のもとに患者の安全性と快適性を目指して診療をおこなう予定である。

図 1

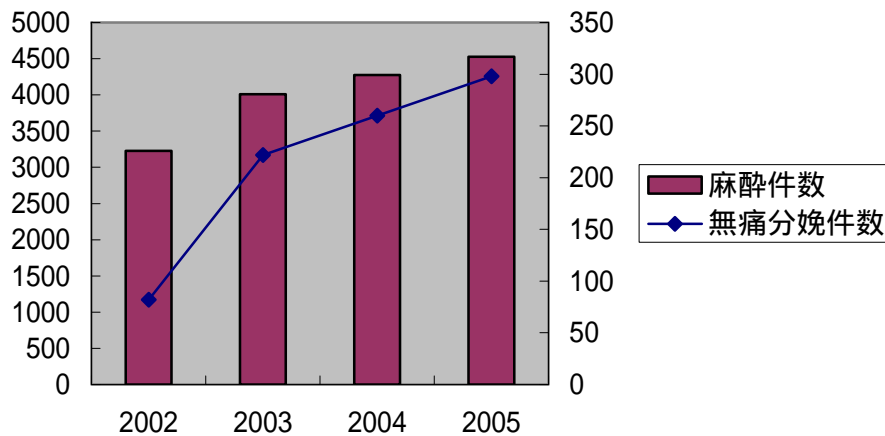


図 2

